

## 母性確立への乳児の個性の影響

東北大学教養部

仁平 義明 (Yoshiaki Nihei)

東北大学教育学部

村井 憲男 (Norio Murai)

東北福祉大学福祉心理学科

村井 則子 (Noriko Murai)

### I 要約

母性の確立に、乳児の個性がどのような影響をおよぼすかを検討した。新生児、1か月児、及び4か月児の母親が、子の行動特性の評定と、自己の母親としての自信(有能感)、実感の質問紙による評定を行った。さらに、母の自信と実感がそれぞれ、子の行動特性の違いからどの程度説明されるかが、重回帰分析によって分析された。母親の自信に対する子の行動特性の重相関は、その子が第1子である場合は、どの時期においても有意であった。特に、4か月の時点では親の自信のおよそ3分の1の部分が子の行動特性によって規定されることが明らかにされた。親の自信(有能感)に影響する子の特性は、「状態のわかりやすさ/扱いやすさ」、「規則正しさ」、「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」で、なかでも「状態のわかりやすさ/扱いやすさ」の影響が最も大きかった。これらの特性は、ゴールドバーグが親の有能感に影響する乳児特性として仮定した「状態の読みとりやすさ」「予測しやすさ」「反応のあらわれやすさ」の3つに実質的に対応しており、母子相互作用のモデルとしてゴールドバーグ・モデルが妥当であることが確認された。一方、母としての実感の評定に対する子の行動特性の重相関は、やはり、第1子4か月の条件で最大であった。実感に寄与する最大の要因は「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」であった。結果からは、母親としての有能感や実感に反映される母性は、子との相互作用の過程で漸次確立され、変化していくものであることが示唆された。

### II 緒言

#### 1) 形成されるものとしての母性

成人期に起こる人格変化の最も大きなものは「親であること」への移行に伴う変化である。女性にとっては「母性」の獲得であり、男性にとっては「父性」の獲得である。その「母性」について一致した定義がないことは、これまでもたびたび指摘されてきているところである。<sup>1), 2)</sup>しかし、母性は、一応次のように考えてよいと思われる：

「母性とは、母親の子に対する感情、行動、意識の背後にあって、さまざまな養育行動を喚起し、維持する機能をもつ行動-情動複合体である」。さらに、それを可能にするような、母親の心身の健康等の条件や知識-価値体系をも広義の母性に含めることも可能だろう。

およそこの10年間の母性についての研究の流れは、母性を天与のものとしてのみとらえるのではなく、「形成されるもの」としての側面を強調する考え方の方向に進んでいる。たとえば、クラウスとケネルらを中心とする1970年代の母性行動の研究は、母子の初期接触がいかに母性の確立に、さらには母乳の確立に影響するかを示してきた。クラウスら<sup>3)</sup>は、1970年代に行なわれた出生直後の母子接触の影響についての研究を概観して、14の研究のうち10の研究で、有意な母性の促進効果がみとめられることを報告している。このように、形成されるものとして母性をとらえること、いいかえれば、影響されるものとして母性をとらえることは、母性について母親のみに一方的に責任を負わせることのない考え方<sup>1)</sup>

であり、母性確立のためにどのような環境条件をととのえたらよいかという積極的な配慮につながる意味をもっているだろう。

2) 母性確立に影響する子どもの個性

母性の確立に影響する要因のうちで、初期の母子接触以外に、重要な一つの要因として考えられるのは乳児の個性である。プラゼルトンらによる新生児行動特性の研究<sup>4)</sup>、トーマスらによる乳児期からの気質の追跡研究<sup>5)</sup>と、それらに続く多くの新生児、乳児の行動特性の研究は、子どもの個性がごく初期からあらわれるものであることをくりかえし示してきている。このような子の側の個性が実際に母性の確立にどのように影響するかについては、ゴールドバーグ<sup>6)</sup>によって提唱された仮説的なモデル(図1参照)が示唆するところが大きい。彼女のモデルは、もともとは母性に限定したのではなく、乳児の個性が親としての有能感や無力感にどのようにして影響を与

えるかの問題をとり扱ったものである。けれども、乳児期の親子関係では、実際には母子間の関係が特に重要なことと、親としての有能感や無力感は母性の重要な構成要素であることを考えると、このモデルはそのまま母性確立への乳児の個性の影響についてのモデルになるといってよいだろう。なお、母親としての有能感(feeling of efficacy)というのは、自分の働きかけが、子どもの反応をひきだし、変化を起こさせるのに有効であったという経験に伴う、自分が母親として能力ある存在であるという認識と感情をさしている。すなわち、母親としての自信の一側面であるといってもよいものである。

このモデルで親の有能感に影響を与える乳児の個性としてとりあげられるのは次の3つである：(1)状態の「読みとりやすさ」(Readability), (2)行動の「予測しやすさ」(Predictability), (3)働きかけに対する「反応のあらわれやすさ」(Responsiveness)。

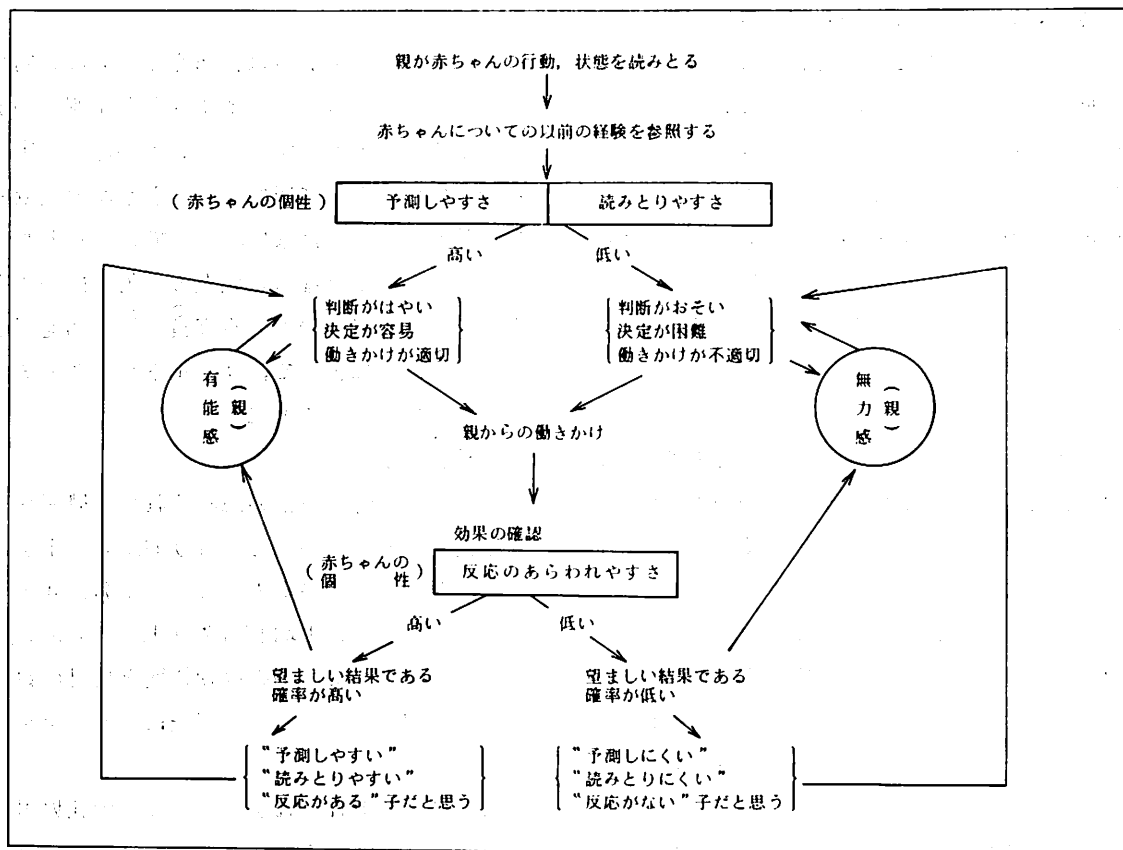


図1. 親-赤ちゃんの相互作用モデル(ゴールドバーグ, 1977)。このモデルは、赤ちゃんの個性(行動の“予測しやすさ”, 状態の“読みとりやすさ”, “反応のあらわれやすさ”)が、親としての有能感や無力感にどう影響するかについての一つの仮説を述べている。例えば、赤ちゃんが泣いている原因を推測して親が対処する場合を考えてみるとよい。

### a. 状態の「読みとりやすさ」

状態の読みとりやすさというのは、ゴールドバーグによれば、“乳児の行動が、養育者にとって、どれだけ明確に（どんな状態であるかを）定義でき、どれだけ判断のための信号と手がかりを与えるかの特徴”で、養育者が“この子はおなかが空いている、疲れている、私を見ている”などという状態をどのくらい判断しやすいかをさしている。要するに、「状態がはっきりしていてわかりやすい」子という特徴をさしている。状態の読みとりやすい乳児は、養育者の有能感を増大させる。それは、(i) 状態の認識がすぐにできる、(ii) どう働きかけて（対処）してよいかの決定がしやすい、(iii) 従って、働きかけが結果的に有効である確率が高い、ことによる。

さて、実際に状態の「読みとりやすい」子とそうでない子という特徴がありうるかについて、ゴールドバーグはいくつかの根拠をあげている。例えば、彼女ら自身がブラゼルトン新生児行動評価尺度の実施をするさいに、行動の特徴の評定が難しい新生児がおり、そういう子どもでは評定者間の一致度（信頼性）も低いという経験をしばしばしていることである。他にも同様な状態評定のしやすさの個人差の研究例についても述べているが、今、きげんが良いのか悪いのか、眠っているのか、目覚めているのか、目覚めかけているのか、状態のわかりにくい子は、検査者にとってだけでなく、親にとってもそうなのだろうという。

### b. 行動の「予測しやすさ」

予測しやすさというのは、要するに、その乳児が、いつ、何に、どのように反応するかがいつも一定していて予測しやすいかという特徴である。これには、睡眠／覚醒や食欲の規則正しさ（トマースらのいう気質特徴での *rhythmicity*）、きまった刺激や働きかけに対してどう反応するかの一定性（信頼性）が含まれる。泣いている子が、いつもどういう時に泣くか、どのくらいたてば泣きやむか、どうすれば泣きやむかがわかっていれば、子が泣くこと自体は、親にとってそう不快なことではない。親は予測がうまくいくし、どう働きかけてよいかの決定も容易であるし、それが望ましい結果につながる確率も高い。それゆえ、親は自信をもつことができ、親としての有能感も高まることになる。

### c. 「反応のあらわれやすさ」

親が適切な働きかけ（対処）をしても、子からあまり反応がなければ、親は成功感、有能感をもちにくい。働きかけの次の段階には、「反応のあらわれやすさ」があるかどうか問題になる。「反応のあらわれやすさ」という特性には、養育者の顔や声に注意が喚起されやすいこと、働きかけにすぐに、泣きやむなどの変化があらわれやすいことなどが含まれている。養育者は望ましい効果がよくあらわれることによって、自分の働きかけが有効だったことを確認でき、親としての有能感が促進される。

### 3) ゴールドバーグのモデルの検証

普通、乳児の行動は成熟するに従って、より読みとりやすく、予測しやすく、反応があらわれやすい方向に変化する。また、親も、養育経験を通じて、行動を読みとり、予測し、操作する能力が増してゆく。ゴールドバーグは、このようにして、母性の重要な要素である有能感が形成されてゆくと述べている。

さて、以上のモデルは、あくまでも仮説的なものであり、子の“読みとりやすさ”“予測しやすさ”、“反応のあらわれやすさ”という個性が、実際に、親の有能感の形成に影響するかどうかの定量的な資料に基づくものではない。そこで、われわれは、以前にわれわれが行なった乳児の行動特性の研究資料<sup>7)</sup>と母親の自信についての研究資料<sup>8)</sup>を関連づけて再分析することによって、ゴールドバーグ・モデルの妥当性を検証することにした。

### III 研究方法

対象者は、特に異常の認められない健康な新生児（生後3～8日、平均5.8日）186名、1か月児（日齢26～38日、平均31.9日）286名、4か月児（週齢13～38週、平均17.3週）183名の母親。母親は、以下のように、子の行動特性と自己の親としての自信、実感について、質問紙による評定を行なった。

質問紙は、われわれが、Careyらの乳児用気質評定質問紙（Infant Temperament Questionnaire）に基づいて作成した、新生児と早期乳児期用の行動特性評定のための質問紙である。この質問紙自体については別に報告してあるので、ここで改めて詳しく述べることはしないが、合計37項目（新生児はほぼ

同内容の33項目)の行動について4段階評定をするようになっている。因子分析の結果、新生児、1か月児、4か月児の3つの時期に共通な行動特性が解釈しやすい因子として抽出された：(1)あつかいやすさ/状態のわかりやすさ、(2)敏感さ、(3)動きの多さ(活動性)、(4)規則正しさ、(5)神経質さ、(6)きげんの悪さ、(7)発達の良さ、(8)きげんの良さ/コミュニケーションの良さ(新生児期では7と8は一つの因子としてまとまって抽出され、4を含まない。項目内容と因子分析の詳しい結果については、文献7を参照されたい)。この中には、ゴールドバーグが親の有能感に影響する要因としてあげた、状態の「読みとりやすさ」、「予測しやすさ」、「反応のあらわれやすさ」に相当する特性がすべて含まれていると考えられる。

また、質問紙では、子の行動特性の評定のほかに母親としての自信と実感についての自己評定も別に行われている。<sup>8)</sup>「自信」の評定は、具体的には、「母親として、お子さんの育て方は」という問いに、「1. 上手な方だと思う 2. どちらかといえば上手な方だと思う 3. どちらかといえば上手でない方だと思う 4. 上手でない方だと思う」の4段階で答え、「実感」の評定は、「母親だという実感」の問いに「1. 実感がある 2. どちらかといえば実感がある 3. どちらかといえば実感がない 4. 実感がない」の4段階で答えるかたちをとっている。前者は、ゴールドバーグのいう「有能感」に相当し、後者は、母親としてのアイデンティティの確立の状態を反映していると考えてよいだろう。今回の検討では、乳児の個性が、実際に母親の有能感に影響を

与えているかどうかをみるために、それらと子の行動特性の関連の分析を行なった。具体的には、上述の自信と実感の評定段階をそれぞれ1. 2. 3. 4と得点化し、これに対する8つ(新生児期は6つ)の行動特性の因子得点を説明変数とする重回帰分析を行ない、重相関係数を求めた。

IV 結果

表1と表2に、母親としての「実感」と「自信」についての重回帰分析の結果が示されている。一般に、自信や実感に対する子どもの行動特性の重相関は、第1子で高い傾向が認められた。この結果からは、その子が第1子である場合と第2子以降である場合では、母親の実感と自信がその子の行動特性の影響をうける程度(説明率)は異なっていることがわかる。第2子以降の場合、すでに上の子で母親としての経験があるために、第2子以降の子の行動特徴だけから親としての自信や実感が説明される割合は低くなっている。また、これらの重相関は4か月で最大になっており、その子の育児経験が蓄積されるほど子の行動特性の影響が大きくなることを示していた。

自信と実感の評定値自体は、おおまかには、第1子では、新生児、1か月児、4か月児と順次上昇していき、第2子以降になると、それよりも高い水準でずっと安定している。<sup>8)</sup>

1) 母親の自信に影響する子どもの行動特性

母親の自信に対する子どもの行動特性の重相関は、新生児期の第2子以降の場合を除いて、すべて統計的に有意である(表1参照)。特に、第1子では、4か月で重相関はR = .57に達し、親の自信の32%

表1. 母親の「自信」に対する子の行動特性(因子得点)の重相関

時期		行動特性(因子)(数字は単純相関)								重相関 R	(説明率)
		状態のわかりやすさ /扱いやすさ	敏感さ	動きの 多さ	規則正 しさ	神経質さ	きげん の悪さ	発達 の よさ	コミュニケーション の良さ/きげんの良さ		
新生児	第1子	.40**	-	-	/	-	-	-	-	.45**	(.20)
	第2子~	.22*	-	-	/	-	-	-	-	.25	(.09)
1か月	第1子	.34**	-	-	-	-	-	-	-	.38**	(.14)
	第2子~	.34**	-	-	-	-	-	.18*	-	.38**	(.15)
4か月	第1子	.38**	-	-	.25*	-	-	-	.25*	.57**	(.32)
	第2子~	.30**	-	-	-	-	-	-	-	.37**	(.14)

\* p<.05, \*\* p<.01 相関は有意なもののみ表に示し、他は省略(-)した。

表2. 母親の「実感」に対する子の行動特性(因子得点)の重相関

時期		行動特性(因子)(数字は単純相関)							重相関 R	(説明率)
		状態のわかりやすさ/扱いやすさ	敏感さ	動きの多さ	規則正しさ	神経質さ	きげんの悪さ	発達の高さ		
新生児	第1子	-	-	-	/	-	-	.29*	.34	(.11)
	第2子~	-	-	-	/	-	-	-	.23	(.05)
1か月	第1子	-	-	-	-	-	-	-	.32	(.10)
	第2子~	-	-	-	-	-	-.18*	-	.35*	(.12)
4か月	第1子	-	-	-	.30*	-	-	-	.42**	(.21)
	第2子~	-	-	-	-	-	-	-	.37**	(.14)

\* p<.05, \*\* p<.01 相関は有意なもののみ表に示した。

の部分、子の特性によって説明可能なことを示している。行動特性のうち、自信に最も大きな寄与のある要因をみると、それは、一貫して「状態のわかりやすさ/扱いやすさ」という特性であった。この特性の因子得点と自信の相関は、どの時期も、第1子が第2子以降にかかわらず、有意な正の相関である。なお、この特性因子への負荷量の大きな項目は表3のような項目である。他に、一部、自信と相関のみとめられた因子は、「規則正しさ」、「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」であった。

表3. 「状態のわかりやすさ/扱いやすさ」に因子負荷量の大きな項目(負荷量は-)

項目	負荷量		
	新生児	1か月	4か月
子どもの様子からその状態を知ることはむずかしい	.70	.66	.59
全体的な印象として、扱いにくい	.67	.67	.50
なんで泣いたのかその理由がわからない	.55	.49	.33
いつもきげんは悪い	.64	.63	.49
泣くときは火がついたようにはげしく泣く	.09	.29	.47
目をさました時にぐずる(むずかる、泣く)	.09	.17	.43
睡眠、食欲、排泄などは不規則である	.36	.21	.30

2) 母親の実感に影響する子どもの特性

実感の評定は、「実感」がある方に反応がかたよっているという天井効果のせいもあってか、重相関は低くなっている。実感への行動特性の寄与は、自信の場合と同様に、子との接触経験のある4か月で最も大きい。4か月での重相関は第1子(R=.45)、第2子以降(R=.37)ともに有意な相関になっている。しかし、子のどの特性が実感に寄与しているかは、自信の場合と大きく異なる。「状態のわかり

やすさ/扱いやすさ」は、どの時期でも有意な寄与が認められない。表2の示すように、「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」、「きげんの悪さ」(マイナス効果)、「規則正しさ」が、その中でも、特に「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」が親の実感に関係していた。

表4. 「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」に因子負荷量の特に大きな項目(注:新生児では一部質問項目自体が異なる)

項目	負荷量		
	新生児	1か月	4か月
ほほえみらしいものをうかべる	.58	-	-
あやすとほほえむ	-	.67	.77
あやすと声を出してこたえる	-	.73	.40
お母さんの顔や近くのをじっとみるようにしている	.65	.41	.20

V 考案

この分析結果は、母親の有能感(自信)に影響する子どもの行動特性は、「状態のわかりやすさ/扱いやすさ」、「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」と「規則正しさ」であることを示していた。ゴールドバーグの仮説的なモデルでは、「状態の読みとりやすさ」、「予測しやすさ」、「反応のあらわれやすさ」が有能感に影響する要因としてあげられている。「状態のわかりやすさ/扱いやすさ」は、まさにゴールドバーグのいう「状態のよみとりやすさ」を含む特性である。また、「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」とわれわれが名づけた因子は、負荷量の最も大きな項目が「あやすとほほえむ」、「あやすと声を出してこたえる」である

ことをみると、この因子は、ゴールドバーグのいう「反応のあらわれやすさ」を重要な要素として含んでいる特性であることがわかる。さらに、「規則正しさ」への負荷が最大の項目が、「睡眠、食欲、排泄などは規則正しい」になっていることは、これがゴールドバーグのいう「予測しやすさ」の一つの条件であることを示している。このようにみえてくると、ゴールドバーグのモデルは母親の有能感に対する子どもの個性の影響のモデルとして妥当なものであることが確認されたといつてよいだろう。すなわち、なぜ乳児のある行動や状態が起こったのかがいつもわかりやすく、その後、どういう状態になるか、どういう反応を示すのかが、予測しやすく、働きかけに反応があらわれやすくと、母親の有能感は促進されると結論できる。

特に、有能感に影響する特性のうちで、一貫して最も重要だったのは、「状態のわかりやすさ/扱いやすさ」であった。確かに、子の状態が判断しにくければ、親は次の働きかけの段階へ進むことができず、どう対処してよいかわからないことになる。その意味で、この特性が一貫して影響の大きかったのはうなずくことができる。トーマスらも、気質の研究の中で、difficult childrenすなわち扱いにくい(難しい)子どもたちというクラスターをあげて、このタイプの子どもは親の育児の自信を喪失させ、ときには自己の養育方法への罪悪感を生じさせやすいことを強調している。彼らは、「difficult」であることを、不規則さ、新奇な刺激のしりごみ、慣れにくさ、きげんの悪さ、活動性の高さの複合した特性として記述している。<sup>5)</sup>しかし、状態の読みとりにくさと扱いにくさがともに一つの因子としてままとまっていたことは、扱いにくさの要素として、状態の読みとりにくさが重要であることを示唆していると思われる。

もう一つの興味深い知見は、母親としてのアイデンティティの確立を反映すると考えられる「実感」には、主として「きげんの良さ/コミュニケーションの良さ」という特性の寄与が大きかったことである。特に、この特性に負荷量の大きい項目は、表4からわかるように、注視、微笑、発声などの乳児行動に関係している。ゴールドバーグも、初産の母親が赤ちゃんに「最も強く愛情を感じた」のは、わか

子がアイコンタクトと微笑を始めた時だったというMoss(1970)の研究例をあげて、母子相互作用における注視と微笑行動の重要性を指摘している。<sup>6)</sup>

以上の結果から結論できるのは、母親としての自信や実感に反映された母性の確立は子どもの個性と無関係に行われるものではなく、また、ある時点でall-or-none的に一時に形成が完了してしまうものでもなく、子どもとの相互作用を通じて、漸次形成され、変化していくものだということである。

母親の母親らしい行動は、子どもとの相互作用によって支えられ、母への微笑や応答によって強化されていく。また、それを可能にするその他の環境条件が重要であることも、これまでの幾多の母性研究が示すところである。

## VI 文献

- 1) 大日向雅美: 母性を問いなおすとき, 育児ノイローゼ, 大日向雅美他著, 132, 有斐閣, 東京, 1982.
- 2) Schaffer, R.: *Mothering. Fontana/Open books*, 1977. (矢野喜夫, 矢野のり子訳: 母性のはたらき, サイエンス社, 1979).
- 3) Klaus, M., Dowling, S., Kennell, J.: *Feeding and Behavior: Three Recent Observations. In Infant and Child Feeding (Eds. J. T. Bond et al.)*, 427, Academic Press, New York, 1981.
- 4) Brazelton, T.B.: *Neonatal Behavior Assessment Scale. William Heinemann Medical Books*, London, 1973.
- 5) Thomas, A., Chess, S., and Birch, H.G.: *Temperament and Behavior Disorders in Children. New York Univ. Press, New York*, 1968.
- 6) Goldberg, S.: *Social competence in infancy: A model of parent-infant interaction. Merrill-Palmer Quarterly*, 23:163, 1977.
- 7) Murai, N., Nihei, Y., Nasu, I., and Yonemoto, Y.: *Stability of individual differences in early infancy. Tohoku Psychologica Folia*, 41:95, 1982.
- 8) 伊藤範子, 菅原徳子, 米本行範, 那須一郎, 伊藤紀久子, 村井憲男, 仁平義明: 初産婦の育児自信の喪失, 母性衛生, 24(1):68, 1983.